
嘘だったのに.....

春野天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘だったのに……

【Zコード】

Z5764A

【作者名】

春野天使

【あらすじ】

誰もが心浮かれるゴールデンウィーク。だが、理久の心は沈んでいた。それは、エイプリルフールに思いついた軽はずみな「嘘」のせいだった……

(前書き)

これは、「共同企画小説」です。「嘘」小説のキーワードで検索すると他の先生方の小説も「」覧になれます。

「ゴールデンウイーク真っ直中、ある日の昼下がり。

空は青く晴れ渡り、初夏を思わせるような眩しい日差しと、爽やかな風が吹き抜ける。どこに行つても、長い休みに浮かれ気分の人々で溢れかえっている。

そんな中、あるお洒落なカフェの片隅で、一人浮かない顔をしてジュークをすすっている少年がいた。通りに面したテラスは、どの席も若いカップルで埋まっている。通りを歩く人々のほとんども若いカップルばかりだ。

少年はチラチラとまわりを見ながら、深く暗いため息をつく。

はあ……本当ならこの「ゴールデンウイーク」、毎日久留美とデートする予定だつたのになあ……。

少年は、ズズズッと音を立ててジュークを一気にすする。

このカフェ、久留美と良く来たよな。いつも座るのは一番奥のこの席で……。

氷だけになつたグラスの氷が、カチカチと鳴る。

一つのジュークを一人がストローで飲んだりしたつけ……。

少年はストローから口を離し、もう一度、体中の力が抜けてしまうような重いため息をついた。

少年の名前は山瀬理久、十六才の高校一年生。彼には一ヶ月ほど前まで、白崎久留美しらさきくるみという同級生の彼女がいた。ほんの一ヶ月前まで、理久と久留美は人も羨むくらい、ラブラブなカップルだったのだ。それが、ふとしたことが原因で、二人の仲はあっけなく崩れてしまつた。

それは、四月の初め。春休み中のある日のこと……。

理久は、駅前のいつもの場所で久留美を待つていた。

学校に行く時も待ち合わせていて、駅前の噴水の前。あまり大きくない円い噴水は、待ち合わせ場所としてよく利用される。その日は土曜日だけあって、噴水の縁には何人もの人々が腰掛け、誰かを待っていた。だいたい、これからデートに向かうという感じの、若い男女が多かった。

理久もその中の一人。携帯で時刻をチラッと確認し、軽く縁に腰掛ける。今は九時半。待ち合わせ時間は十時だつたが、理久は大抵早めに来て待っている。

今日はどの「ースで行こうかなあ？」まず遊園地でその後力フェで……。

ぽかぽか陽気の爽やかな四月の朝。あれこれデート「ースを考えると、理久の心は自然と浮かれてくる。

「よお、理久！」

デレーとした顔でぼんやりと視線を宙に漂わせていた理久に、一人の少年が声をかけた。

「今日もデートか？」

「なんだ、進也か」

ようやく我に返った理久は、にやけた顔を進也に向ける。彼は理久の同級生。勉強ばかりしている真面目な生徒だ。

「まあね、お前は休みなのに塾通い？」

「ああ、もうすぐ二年なんだから本格的に受験勉強に取りかからなきやな」

「へえ、かわいそ。ま、頑張れ」

他人事のように理久は言つて、進也に手を振る。理久は進也が苦手なので、早く話しが打ちきりたかった。

「……」

だが、直ぐに駅に向かうだつたと思つた進也は、理久の前で立ち止まり、しげしげと理久を見つめる。

「……何？ なんか用？」

「いや、用というか、ちょっと言いたくのことなんだけど……」

進也は意味ありげな表情をして口ごもる。

「なんだよ。ハツキリ言えよ」

「あのさ、お前の彼女のこと……」

進也は理久に近づくと低い声で呟く。

「え？ 久留美のこと？ 久留美が何だよ？」

大好きな彼女のことが話題になると、理久は大いに気になる。

「それが、僕見たんだ……その、彼女が他の奴とデートしていると

こ」

「はあ？……」

一瞬意味が分からず、理久は口をぽかんと開ける。

「別の学校の生徒だと思うよ。制服違ったしね。言わない方が良いかと思つたけどさ、やつぱこいついう事は言つといた方が良いかと思つて」

冷静な口調で進やは言つ。

「えつ？ ちょっと、何だよそれ……」

理久の顔は次第に青ざめてくる。久留美に限つて浮氣などするわけないと思つてている理久だが、やはり気になる。

「あ、付き合つてるとか彼とかそういうの分からないから。ただ、仲良さそうにはしてたなあ。じゃあ」

それだけ言つと、進やは駅の方へと向かう。

「おい、待てよ！ ちょっとその話」

急いで駅へと向かう進也を、理久は慌てて追いかけた。

「待てつたら！ 詳しく聞かせろ」

進也に追いつき、彼の肩に手をかけた理久は、彼の体が小刻みに震えていることに気付く。

「……？」

進やは理久の方に振り向くと、声を立てて笑い出す。

「おつかしい！ さつきの理久の顔！」

「何だよ！ どういうつもりだ！」

真剣な顔をして怒る理久を見て、進やはまた笑う。

「今日が何月何日か知ってる？」

「はあ？ 今日は四月一日だろ？……あ」

理久もようやく気がついた。四月一日はエイプリルフール、嘘を言つても構わない日だった。

「こんなに簡単にひつかかるとはねえ」

「……チエツ」

理久は、お腹を抱えて笑う進也の肩から乱暴に手を放した。

「じゃあな、デート頑張れ」

そのまま進也は笑つて駅に入つて行つた。

「エイプリルフールか……」

駅の中に消えていく進也の後姿を見ながら、理久は咳く。

「理久ー！」

午前十時を少し過ぎた頃、ワンピースに桜色の薄手のカーディガンを羽織つた久留美が駆けてきた。ワンピースの裾がそよ風になびいて、ふわふわ揺れる。

久留美のつけた香水が、風に乗つて甘く香つてくる。彼女は、満開の桜の花のように美しいと理久は思った。いや、桜の花よりも綺麗だと、理久には思える。

「ごめんね、待つた？」

噴水の所まで走つて来た久留美は、理久に満面の笑みを向ける。

「ううん、全然。行こっか」

久留美に見とれていた理久は、噴水の縁から腰を上げた。久留美との待ち合わせなら、一時間でも一時間でも待てそうだと理久は思う。久留美は微笑みながら、理久の腕に腕をからめた。

最高に幸せ。

理想の彼女との順調な交際。これ以上の幸せなどないと、理久は思つている。理久の心は、桜満開の春の季節のように浮かれっぱなしだった。

その日も遊園地、カフェ、映画というデートコースを楽しみ、夜まで久留美と過ごした。そして、いつも最後は、久留美のマンションの近くの公園に立ち寄っている。

ベンチに肩を寄せ合って座り、ぼんやりと夜空を眺めたり、とりとめのない話しをしたり、デートの終わりをなじり惜しむように時間を使っている。

それから、最後の最後は、いつもより長めの甘いキス。

そろそろキスの先に進んでもいいかもしない、と理久は思つているが、なかなかその勇気も出ないでいた。

久留美は俺のこと好きだとは思うけど……本当の気持ちとかハツキリ聞いたことはないよな……。

「…………どうかした？」

久留美は理久の唇から唇を離し、理久を見つめる。

「あ…………ううん、何でも…………」

「そう…………」

少し不満げな顔で、久留美はベンチから立ち上がった。

「じゃあね」

「うん、また後でメールするよ」

「うん…………」

理久も腰を上げて、久留美に軽く手を振る。久留美は理久を一瞥すると、公園を横切り、向こう側のマンションに駆けて行つた。

まさか、進也が言つてたこと本当じゃないよな?…………。

家に帰り、自分の部屋のベットに寝こんで、音楽を聴きながらくつろいでいた理久は、ふと朝の進也の言葉を思い出す。

あれはエイプリルフールの嘘だし…………。

理久は壁に貼つたカレンダーで、今日の日付を確認する。シンプルな数字だけのカレンダーには、四月一日をハートマークで囲んで、

『久留美とデート』とちゃんと書いている。

そう言えれば今日はエイプリルフール、久留美にもなんか嘘をついてみようかと思つたけど、試せなかつたよなあ。なんかメールで嘘ついてみようかな?……。

悪戯心のわいてきた理久は、携帯を手に取り、あれこれ考えてみる。

そうだ、久留美の気持ちを試してみようか。俺のこと本当に愛しているかどうか。

さんざん考えた末、理久はようやく久留美にメールを打ち始めた。
「あ、間違えた……えっと」

欠伸をしながら理久はもう一度打ち直す。

マジで書かなきゃな。久留美がどういう反応するか楽しみ。
理久は面白そうに笑いながら、送信キーを押す。

『俺達、付き合い始めて一年になるけど、そろそろ受験に専念したいし、もう別れないか?』

直ぐに久留美から返信メールが来る。

『え? 本気?』

本気つて、そんな訳ないだろ。やっぱ久留美心配なんだ。
理久は尚も笑いながら、更にメールを打つ。

もう少しさぐつてみようか。

『久留美が他の男子と付き合つてるって噂聞いた。俺のこと飽きたんだろ』

『そんな噂、嘘。理久は信じてるの?』

また久留美からの即行返信メール。

信じてないさ。あれはエイプリルフールの嘘だし……久留美も簡単にひつかかるタイプなんだなあ。なんか、可愛い。

今日がエイプリルフールだと、理久がメールしようとした時、久留美からもう一度メールが来た。

『……分かつた。別れても良いよ。その方がいいかもね』

「はあ?」

理久はベットから身を起こす。

何だよ、久留美は……エイプリルフールの嘘だつてのに……あつ、そうか、久留美も俺をひつかけようとしてるのかも。それなら、俺も。

『OK。別れよう。恨みっこなし』

理久はメールを送信する。

俺、今度は騙されないからな。久留美、ビックリしてメールして来るかも。

理久は笑みを浮かべて、久留美からのメールを待つ。

「……」

その後、いくら待つても久留美からの返事は来なかつた。

なんだよ、久留美は！ 勘ねたのかな？……。

理久はちょっと心配になり、もう一度メールを打つ。

『エイプリルフールでーす！ ひつかかつた？』

メール送信。が、メールは送信エラーとなつて届かない。

「は？」

理久はもう一回メールするが、また送信エラー。

「……」

理久の笑顔は、段々ひきつてくる。

「もしかして久留美、本気にして？ これって着信拒否？……」

ベットの脇の目覚まし時計の針は、もうとっくに十一時をまわっていた。今は、四月一日。エイプリルフールは既に終わっていた。

「……！」

その日以来、久留美からメールが来ることはなかつた。理久が送つたメールも久留美に届くことはなかつた。ジ・エンド。それは、あつけない幕切れだつた。

春休みが終わり、一年生になり、久留美とは別のクラスになつた。今では顔を合わすことさえ、あまりなくなつてしまつた。噂によれば

ば、久留美に新しい彼氏が出来たとのこと。それは、他校の生徒らしい。理久は進也のエイプリルフールの嘘が気になつたが、モテル久留美のこと、仕方のないことかもしれない。

しかし、理久は割り切れない。未だに久留美への思いを引きずつていた。

「あ……何でエイプリルフールなんてもんがあんだよ！」

空になつたジュークを、理久はストローでかき回す。行き場のない怒り。身から出た鎧というものだろうか……理久はストローが折れそうなくらい、グルグルと氷をかき混せる。

「おさげしましちゃうか？」

ふと、澄んだ明るい声が、理久の頭上から聞こえてきた。

「あ……」

「今日はお一人ですか？」

ウェイトレスの女の子が、笑顔で理久を見つめている。

「……はい」

「お客様、良きいらっしゃいますから、私がもう一杯サービスしますね」

二口りと微笑む笑顔が眩しい。

「あ、ありがとうございます」

ウェイトレスは、手際よくテーブルからグラスを下げ、一礼して去っていく。その姿を理久は目で追う。

俺が常連だって知つてたんだ。あんな子いたっけ？ 今まで気付かなかつたな。

理久の不機嫌な顔が、自然と笑顔になる。久留美とのデートの時は、久留美との会話に夢中で、カフェのウェイトレスに注意など払つていなかつた。独りぼっちの暗いゴールデンウィークに、ほんの少し日が差してきたような気がする。残りのゴールデンウィーク、毎日ここに通おうと理久は心に決めた。 完

(後書き)

初めて共同企画小説に参加させていただきました。この小説のネタは、以前靈・ZA・音さんに提供していただいたものです。今回ちよづじ「嘘」がテーマだったので、使わせてもらいました。ありがとうございます。

他の先生方の作品も楽しみにしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5764a/>

嘘だったのに.....

2010年10月8日15時31分発行